

武蔵野日曜聖書講筵

思慕の魂——キリストへの忠誠——

——詩篇第137篇——

（「活かすキリスト」誌第134号 1977年4月号より転載）

1976年12月12日

小池辰雄

まえがき バビロン河畔の想い出 汝エルサレムよ！ 汝、キリストよ！ 「本来無東西、何処有南北」 み霊の宿るところに神殿あり 兄弟喧嘩 報復観念 贖罪の十字架 孝道師道 ダビデの忠誠

【詩篇137】

- 1 われらバビロンの河のほとりにすわり、
シオンをおもいいでて涙をながしぬ。
- 2 われらそのあたりの柳にわが琴をかけたなり。
- 3 そはわれらを虜にせしものわれらに歌をもとめたり。
我儕をくるしむる者われらにおのれを歡ばせんとて、
シオンのうた一つうたえといえり。
- 4 われら外邦にありていかでエホバの歌をうたわんや。
- 5 エルサレムよもし我なんじをわすれなば
わが右の手にその巧をわすれしめたまえ。
- 6 もしわれ汝を思いいでず、
もしわれエルサレムをわがすべての歡喜の極となさずば
わが舌をわが脰につかしめたまえ。
- 7 エホバよねがわくはエルサレムの日に
エドムの子輩がこれを掃除け
- 8 ほろぼさるべきバビロンの女よ、
その基までもはらいのぞけといえるを聖意にとめたまえ。
- 9 なんじの嬰兒をとりて岩のうえになげうつものは福になるべし。

●まえがき

この詩篇は、バビロニア捕囚からまだ復旧されていないエルサレムに帰還したばかりの



頃、イスラエルのだれかが書いた詩^{うた}とされます。

バビロニア捕囚というのは、第1回は597年で、それから10年後、紀元前587年、エルサレムがバビロニア王ネブカデネサルによって陥落したとき、第2回捕囚がいとなまれました。それから半世紀あと、バビロニアを亡ぼしたペルシャの王クロスによって紀前538年に帰還をゆるされるまでの50年間をバビロニア捕囚時代といいます。捕囚の身になっていたのはイスラエルの主な人たちでした。

イスラエル人の信仰はエルサレム中心、神殿中心ですから、それから彼らが離れれば、場所的に異国にいたので、信仰も失ってしまうというような政治的な策略もあったと思われます。けれどもその捕囚の民の中にも、やはり、祭司的預言者がいまして、集会をやりある制限のもとに開いていたわけです。その中の主な人が預言者エゼキエルでした。この詩篇の作者は多分このエゼキエルに導かれた人でしょう。

●バビロン河畔の想い出

1 われらバビロンの河のほとりにすわり、

シオンをおもいいでて涙をながしぬ。

「バビロンの河のほとり」、エルサレムはシオンの山とも言われる丘陵の上にあります。すなわち、イスラエルは山が中心である。ところが、バビロニアはチグリス、ユーフラテスの大河が中心で、河畔の都市です。

「シオンを思いいでて涙を流しぬ」、西の方、遙かシオン、エルサレムを想うて望郷の念にかられました。帰りたいなあ！と、魂の故里を想ってひそかに涙したのでした。

2 われらそのあたりの柳にわが琴をかけた。

躍如と書いてありますね、一幅の絵を見るように。神を讃美する歌を歌いたいんだけど、歌うわけにいかん、弾くわけにいかん、異国だから！

3 そはわれらを虜^{とりこ}にせしものわれらに歌をもとめたり。

我^{われら}儕^しをくるしむる者われらにおのれを飲ばせんとて、

シオンのうた一つうたえといえり。

そは、われらを虜にしたものが、

「ひとつおれたちを慰めるために歌をうたってくれ」と言っただけども、

「そんな異国の者に神讃美の厳かな尊い歌をうたえるか」というわけで拒んだ。恐らくは迫害にも遭ったかも知れませんが。

●汝エルサレムよ！

4 われら外邦^{とつくに}にありていかでエホバの歌をうたわんや。



5 エルサレムよもし我なんじをわすれなば

わが右の手にその巧^{たくみ}をわすれしめよ。

この5節は非常に力強いことばです。それこそ、この5節を忘れることはできない。

「右の手にその巧^{たくみ}を」というのは、右の手で琴をもつて弾くから。また、文人ならば、右の手で讚美の文章を書くでしょう。彫刻の人ならば、やはり、右の手で槌を打つでしょう。

「右の手のわざ」ということは、その人の一つの天職をある意味において象徴するようなことばです。「右の手」といつても要するに、わざはこれは全身的なんです。身心のわざ、これが右の手のわざの真意でしょう。このわざは、何のためのわざかと言えば、「汝」のため。この詩篇は一人称、二人称でもつて非常に力強く書いています。

「我なんじをわすれなば」、昼も夜も、毎日、あなたのことを忘れることはありませんと。恋人同志はそういうこともあるでしょう。神を、「汝」をもし忘れたならば、これは不信であります。宗教の世界で、この不信が罪です。罪というのは信義を裏切ることことです。

私もまたこの詩人と同じくまさに「汝」に生きている。「汝」とは誰か。キリストという福音体です。これに生きている。私自身がダメな奴だから、破れ器だからこそ「汝」に生きている。この私の根源の事態を見そなつて、何んのかんのといつて集会を去るなら去るにまかせるまでです。私は江戸ッ子だから、乱暴な言葉を使うけれども、

「勝手にしやがれ！」

と。彼らは私のはなしを録音したテープをたくさん持っている。いつかそれを聴きなおして、やつぱりおれは間違つていたと思う時がくることを忍耐して祈る待つより仕方がない。

● 汝、キリストよ！

「汝」というキリスト、これは何にも変えられない。聖歌にあるね、「キリストにはかえられません」(521番)と。だから、

「あなたを忘れたら、もう、右の手のたくみを忘れさせてください、どうかしてしまつてください」

と。我々もどうかなつてしまふ、キリストを忘れたら。キリストぬきになつたら、われわれの仕事は、生活はみなどうかなつてしまふ。それなのに福音と文化文明を同次元に置いて、

「どうも、それが片がつきません」

なんていつて、出てつたりする。何を聞いているのかね。文学でも絵でも彫刻でも、それが本ものになるには、自分自身のたましいが宗教の絶対界に入らねばダメなのだ。私が『芸術のたましい』(著作集第二巻、1976年12月刊)で叫んでいる通りです。本当にこの世界に入ったら、その右の手のわざが、無限無量の展開をはじめ。これは原動力だから、他のものと比較することのできない次元です。ある一流の歌手がああ『芸術のたましい』を読んで、感激の電話をくれました。



だから私は、この「汝」は絶対次元だと言っている。これだけの魂の気合いを持っていなかったら、また持っていれば、何がどうなつても大丈夫です。いいですか。人生はいろんなことに出つくわします。失恋したり、入学試験をやりそこなったり、就職がうまくゆかなかつたり、事業に失敗したり、病気にかかったり、近親が死んだり……。そのときこそ「汝」に來なさい。「汝」を忘れたらおしまいです。

そういうわけで、私は本当にあなたがた一人一人を百万人とも換えることのできないひとりとびとりにしたいわけだ。またなつてもらいたいわけだ。孤軍であれよ！ 天に「汝」キリストを中心とする万軍が味方するよ！ これが天降りして「我」を助ける。

●「本来無東西、何処有南北」

すべての問題「の解決」は、この「汝」からきているんです、宗教の一番根源の世界から。仏教の人は仏教の世界で徹底的になつてもらいたい。

仏教と言え、昨日、浅草で会があつた。時間が早かつたので久し振りに私は仲見世を歩いていた。浅草は庶民情緒があつていい。そうしたら坊さんが歩いてきた。その坊さんの菅笠を見て、私はびっくりした。あの菅笠もらいたかつたな。そこに何と書いてあつたかと言つと、

「本来無東西、何処有南北

迷故三界城、悟故十方空」

（本来東西なし、何処にか南北あらん。

迷うがゆえに三界の城、悟るがゆえに十方空なり）

これが菅笠の上に十字形に書いてあつた。私はこれを読んでびっくりした。しばらく、じつと後をつけて歩いてた。あれ、話しかければよかったな。この句は木喰上人のことばです。彼は木彫する有名な上人で——私は木喰のあの仏像が大好きだ——あれを造りながら全国を歩いてた。拙著の木喰上人のひとくだりのところ（『芸術のたましい』53〜54頁）を是非参考に読んでください。

地球は文字通り球形で、いたるところが中心となります。そのようにキリストを有つところ、到るところは聖地であります。イスラム教徒はメッカを聖地として、その方を向いて拝しますが、キリストはヨハネ福音書にある通り、サマリヤの女に、

「ゲリジムでもなければ、エルサレムでもない、到るところで神を拝する時が

来る。否、既に來ている」

と言われました。これは、

「天界の都エルサレムには神殿もない。神の羔が活ける神殿だ」

と黙示録21章22節に示されているのと同じ精神です。地上においても天上においても、心はキリストの在すところ（いま）です。



●み霊の宿るところに神殿あり

「汝」に限り無く捉^{とら}われていくのみ。この詩篇の「汝」は「エルサレム」ですが、我々にとつては、「キリスト」です。

「キリストよ、もし我、なんじを忘れなば、わが右の手にその巧を忘れしめ給え、ああ右の手にその巧を忘れしめ給え。ああどうにもなりません!」

そういう気合いですよ。商売でも、会社でも、医術でも、絵画でも、学校でも、何でも。海の水を見て、「あれは塩辛い」なんて思いますか。どこに塩がありますか。塩なんか見えない。塩が見えなければ、なめてみれば塩っ辛い。本ものはそのように、溶け込んでいるものなんです。宗教臭いんじゃないんです。宗教が本当にその中に溶けているような在り方。そういうことになれば本ものとは言えません。それを、

「あの信仰はどうも。こういう信仰箇條が氣にいる、氣にくわない」
だとか、

「礼拝の仕方がどうであるこうである。祈り方がどうであるこうである」

とか。そんなことは、みんな末の話です。そんなことにこだわっているうちは、本ものの世界に入れない。本ものは溶けてる世界ですから。

この花を見てください。花は土から栄養分を取っている、太陽の光を受けている。しかも光も溶けていけば、土の栄養分もみんな溶けてしまっている。みんなそれぞれの姿と香りと形で、太陽光熱と地の一切の養分を表している。しかしながら根源はみな同じ一つ。太陽の光であり、土の養分である。表れ方は千態万化である。そこに本当のハーモニーがある、調和がある。百花繚乱の趣きがある。それがみんな同じだったらどうするか。

花の咲くところに太陽の光あり。水滴のあるところに月影は宿る。虹のかかるところに陽光は融けている。そのように、

「み霊の宿るところにキリストという活ける神殿あり」

であります。

あなた方一人ひとりがそれぞれの、のつびきならない自由な在り方をしてもらいたい。しかし、その自由は自己本位の勝手気儘じゃ絶対じゃない。キリストの宇宙の霊氣が溢れているような自由! 「天地正大の氣」の詩句は大好きですが、あれを思い出してください(『芸術のたましい』20頁参照)。

「天地正大の氣」を書かした藤田東湖の靈感はすばらしいよ。あのような本当に自由無碍な、靈然・神然^{しんぜん}たるところの人間の姿になりたいものです。

私もみ霊の自由をいただいてから、そういう境地に入ると、すぐそういうようになる。それでちゃんと生命を掴^{つか}んでいる。それで楽しくなってしまう、自分ひとりで。こだわっちゃダメですよ、なんでも。みんな飲んじゃう。みんな消化してしまう。善からざるは無し。みんな神様のわざであります。どうしても私はそういう角度から、靈的神学を書かざるを



得ない。

「キリストよ、われ汝を忘れなば、わが右の手にその巧を忘れしめ給え」

こういう句はすっかり魂にきざみこんでおきなさい。「エルサレム」のかわりに「キリスト」だ。もう私のはらわたの中に異言が来ているんです！

6 もしわれ汝を思いいでず、

もしわれエルサレムをわがすべての^{よろこび}の^{きわみ}の極となさずば

わが舌をわが^{あき}の脛につかしたまえ。

キリストはまさに私の歓びの極みです。キリストなしで生きているようなクリスチャンがたくさんあるよ、そんなのはクリスチャンでも何でもない。道を歩いても、何をしていても、

「主さまー」

とはわたの底から叫びかけているような魂でなければね。この5節、6節、これが詩篇137篇の中心です。これだけといってもいいくらい。あとはまた旧約の限界内のことばが出てくる。

●兄弟喧嘩

7 エホバよねがわくはエルサレムの日に

エドムの子輩^{こら}がこれを掃除^{はらい}け

その基^{もと}までもはらいのぞけといえるを^{みこころ}の聖意にとめたまえ。

「エドムの子ら」というのはヤコブの兄弟エドムのことで、ヤコブと喧嘩した。兄弟でありながら、イスラエルとエドムは不倶戴天の仇みたいになっていました。兄弟争いの第一はアベルとカイン。創世記第4章のあまりにも印象深い物語！ とうとうカインがアベルを殺した。

「四海兄弟を思つのに、なんで国際間に波風が立つか」

(よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ)

という主旨の明治天皇の名歌があるね、日露戦争をせざるを得なかった明治天皇も、そういう心境を持っておられた。今の天皇陛下だって、戦争なんかしたくなかった。けれども、ああいうことになってしまった。

そのカインやエドムの兄弟喧嘩、人類の歴史の終わりまで、要するに戦争は絶えない。戦争が歴史を終わらせる。今度、大戦争があつたら世界はおしまいだからね。結局、力があるものを言う。地上じゃそういう武力がものをいつている。これは要するに兄弟喧嘩。キリストは十字架にかからざるを得ない。今またキリストが現われたら、また十字架にかかる。カインとアベルの事態、歴史の最初の物語りが、最後をあらわしている。

だから、人間は絶対に救いを要する。宗教のことは万人の根源の事態なんです。言葉を



出せば、私はこの頃、憤慨せざるを得なくて困ってしまったな、まあいいよ。それでこの詩でも、あと何と書いてあるかというと、

「エドムの子らが、これを掃い除け、その基までも掃い除け」

とそう言つて、エルサレム、ユダヤを非常に敵視しています、

「それは忘れないでください、聖意にとめて、復讐してください」
とのことです。

●報復観念

8 ほろぼさるべきバビロンの女よ、

なんじがわれらに作しごとく汝にむくゆる人はさいわいなるべし。

9 なんじの嬰兒をとりて 岩のうえになげうつものは福になるべし。

まあ詩篇のうちで一番いやらしいというか、とんでもないことばの一つだよ、

「なんじの嬰兒をとりて 岩のうえになげうつものは福になるべし」

と。幼児とか嬰兒は万国共通にかわいいものです。一つも憎むべきものじゃない。それを「岩の上になげうつものは幸福なるべし」と、聖書の中に書いてある。聖書は、とんでもない書だな。普通、いきなり読む人は、びっくりする。

「もう聖書なんてやめた」

なんて、そうなってしまうよ。だけど、ユダヤ人には、

「目には目を、歯には歯を」

というのがあってしょ、強烈な報復観念、復讐観念。報復観念の強いのは、ゲルマン人もそうだった。『ニーベルンゲン物語』というのがあつたら、あれがそうです。同じゲルマンの諸族が共倒れになつてしまふ、悲劇的なドイツ民族詩です。

「人もし相争いて妊める婦を撃ちその子を墮させんに、別に害なき時は必ず

その婦人の夫の要むる所にいたがいて刑せられ法官の定むる所を為すべし。

若し害ある時は生命にて生命を償い、目にて目を償い、歯にて歯を償い、手

にて手を償い、足にて足を償い、烙にて烙を償い、傷にて傷を償い、打傷に

て打傷を償うべし。」(出エジプト21・22・24)

これを「レックス・タリオニス」「復讐律」というんです。レビ記の24章にも、申命記の19章にもあります。ユダヤ的報復観念は、シェイクスピアの『ベニスの商人』でもうかがわれるでしょう。

●贖罪の十字架

だからパウロは、

「罪の価は死なり」



といている。我々は罪の価の死を刈り取らなければならない。神さまに審かれたら、みんなダメなんだ、亡びてしまうんだよ。ところが、キリストは十字架をもつて罪を贖い給うた。死をもつて罪の罰を受け給うた。罪の罰としての十字架には、そういう意味がはつきりあります。その罰をキリストは十字架で受けたんです。彼らが十字架につけたというのは相対的な現実で、キリストの霊的現実^{こひつじ}は、罪を贖うためです。

「罪を負う神の羔^{こひつじ}」

とヨハネが言っているように。彼が罪をしょって、罰を受けて、自ら死を死に給うたので、我々は無罪放免となりました。キリストの十字架の贖いは、私たちを罪と死から解放してくださったわけです。全部、キリストが引き受けた、

「私がみんな引き受けたよ」

と。それに対して何が言えるんですか。ことばじゃないです。ひれ伏すより他にないですよ。私たち死刑囚が無罪放免されたんです、キリストによつて。

そして、無罪放免されて、しかも今度は、

「本当の生命をやるぞ」

と、死生の転換をしてくださった、この十字架をもつて。聖霊が今度はくるから、これが絶対恩寵でなくて、何が絶対恩寵ですか！

私は仏教でも何でも飲み込むけれども、中心ははつきりしていますよ。決してぼけているのではないですから。

「小池というのは、何だかんだ、いろんなものをまぜあわしている。まるで五目寿

司みたいだな」

と言うかも知れない。そうじゃないよ——中心は沢庵のお茶漬けだ——日本のキリストです。そういう中心がはつきりしていますから、無限無量のものが展開して、一切を包摂してしまうというわけです。

だから、こういう、

「生命には生命を、目には目を、歯には歯を」

という觀念が、やっぱりこの詩篇にも現われている。彼らは正直、エルサレムで殺されたよ。女も子供も殺されたり、いろんなことになった。惨憺たるものだ。エレミヤ哀歌を見てください。悲惨な状況が書いてある。だからその復讐をするという。キリストも長子たちの殺害という犠牲を負っていたんです。

まあ砂漠の民は血なまぐさいね。日本人にはあんまり肌に合わない。日本人には、仏教的な方が肌に合うんだけど。しかし、ただ肌に合うじゃ、仕様がな。魂の肌には、今度は福音の方が合う。大悲大慈もいいですよ。でも、この恐ろしいところを通ると今度は、悟りでなくて、もつとものすごい本当の救いの世界というものがある。仏教でも救いということを言うさ。けれども、このキリストの聖霊の生命の世界は無比です。仏教でも如来



の霊ということは言うけれども。

だから終りの7～9節の血なまぐさい復讐の心を、キリストが十字架につけてしまった。詩篇をキリストの光が貫いて、生き生きとしたものにして読んでください。旧約の単なる次元で読んでいたらダメですから。

●孝道師道

「山はさけ海はあせなん世なりとも

君に二心わがあらめやも」(源実朝)

実朝は万葉集を新しく受けとったすばらしい歌人であると正岡子規が言っています。この「君」は「キリスト」だ。恋人同志だつてこういう境地はあるだろうね。

私は藤井先生という先生に対しては、こういう気持を持っています。

「私の恩師、藤井武」

と、そう言っても、私は藤井先生をかつぐようなことはしない。いわゆる「藤井先生、藤井先生」というような連中よりも、もっと深く本当に意味において先生を尊敬しています。先生を尊敬しても拜んではいません。藤井先生が「真実」と言うと、みんな「真実、真実」一点張りでやっている。

「儀文は殺し、霊は活かす」(コリント後3・6)

という。私は藤井先生の

「真実」

という精神を、もう一つ突き抜けて、

「碎け」

と言っている。藤井先生の偉大な『羔の婚姻』という詩篇が遂に未完成で終わってしまった。最後の一句は、まるで予言みたいな句だよな。

「先の二つの禍害に増す」

第三の禍害、地に住むものら

哀哭切齒することあろう。」

(藤井武全集第一巻『羔の婚姻』より)

「もし、もう一ぺん禍害がきたならば、

この世界は嘆き齒がみして、もうどうにもならん」

という句で終わっている。「もう一ぺん」というのは第三次戦争。藤井先生の詩篇の続篇を書くわけではないが、私は先生の志を私は継ぐつもりだ。

そういう「孝道師道」というものを、日本人は忘れてはダメだよ。この間言ったでしょ、諸橋徹次先生が臥薪嘗胆三十年。その中の十年間は失明したんです。そしてやっと治されて、更に続けた。それ以前には自分の原稿も、また組版も焼かれてしまった。それをまた



書き直した。そして遂に、『漢和大辞典』という、全十二巻の驚くべき、個人の書いた辞典では世界一の辞典を完成された。それができ上った時、諸橋先生は何と言ったかという、

「これでやつと親孝行ができました」

と言ったそうだ。これが孝道です。

「孝道師道」

こういうものを忘れたり、特に裏切った奴は地獄のどん底にいく。ダンテが忘恩者や裏切り者を地獄のどん底においている。ダンテの『神曲』なんかも時々読んでくださいよ。今度私はダンテのことも書きましたから（『芸術のたましい』中の「ダンテの苦難」のこと）。

日本人は「民主主義」なんて、空念仏なんか言って全然なつちやらん。もう民主主義なんていう言葉を聞くのもいやだ。本当の意味においては、「民主」の土台に

「神主」
しんしゅ

がなければダメだ。もう一ぺん日本人の本道に還れ！ 決して民主主義とは、本当の意味では、矛盾はいたしません。もう私のような明治の人間がだんだんいなくなるからね。あんたがたは、よく継いでもらわなくては困るよ。

●ダビデの忠誠

「山はさけ海はあせなん世なりとも」

という、これと同じ精神に生きていたところの人が旧約にいた。

「君に二心わがあらめやも」

ということを実存してきた人がいた。サムエル前後書を読みましたか、ダビデです。ダビデは、自分の王様のサウロに追われて殺されようとした。しかし、ダビデは、そのような妬みの悪い悪霊がついていた主君サウロに、決して仇をかえそうとか、背こうとかしなかった。自分を殺そうとしたその主君に対して、どこまでも忠誠であるという——普通の忠誠とはまた違うんだ——ある意味では、赤穂義士よりも偉いかも知れない、ダビデは。サムエル前書24章14節に、

「¹⁴イスラエルの王は誰を追わんとて出でたるや、汝たれを追うや、死にたる

犬をおい一つの蚤^{のみ}をおうなり」

と。自分のことを「死んだ犬」だとか、「一つの蚤」だとかダビデは言っている。

「あなたは、その私を追っかけて、どうなさるんですか」

と。その少し前にも書いてある。10節から、

「¹⁰視よ、今日汝の目、エホバの汝を洞^{ほら}のうちにて今日わが手にわたしたまい

しことを見たり。人々我に汝をころさんことを勧めたれども、我汝を惜しめり。

我いいけらく、わが主はエホバの膏^{あぶら}そそぎし者なればこれに敵してわが手を

のぶべからずと。



サウロはサムエルに油注がれた人でした。油注ぎで神霊がきた時はよかったんだけど、ダビデに対して妬みを起こした。その時に神の霊が悪霊に変わってしまった。切り変わってしまった。だけれども、とにかく「油注がれた者」即ち「メシヤ」なんだ、
「自分は主君に叛かない、そう決めた」
という。

11 わが父よ視よわが手にある汝の衣の裾を見よ、わが汝の衣の裾をきりて汝を殺さざるを見ば、わが手には悪も罪過もなきことを汝見て知るべし、我汝に罪をおかせしことなし。然るに汝わが生命をとらんとねらう。」(サムエル前 24・10～11)

「けれども、私はそれに対して復讐はいたしません」

と。ダビデはまさにこのキリストの気持を先駆した人です。自分を殺そうとする者も、もう手にかかっているんです、本当は。ひと突きできるんです。けれども、それをしませんでした。

「ごらんの通りです、あなたの衣の裾がここにあるじゃないですか、私みたいな死んだ犬、蚤みたいな者を追って何になさるんですか」

一匹の蚤と言っている。これが

「君に二心わがあらめやも」

です。

「海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍
おほきみへ
大君の辺にこそ死なめ かへりみはせじ」

と、戦争の時によく歌われた歌です。日本の軍人がなぜ強かったかと言えば、やはり天皇陛下に対する、この忠誠です。君のため、国のために、とにかく生命を捨てて行った人。戦争の是非はともかく、彼らは生命を捨てたんです。それに対して、やはり時々、冥目して、

「我々の今日あるのは彼らの犠牲によった」

ということをおわらないでどうするんですか。

だから、詩篇137篇の、

「もし汝を忘れたら、私はどうにもならない、地獄行きだ」
という。

「キリストなしには生きていられません。私のいのちのいのちです、どうぞ私を通してあなたの聖業を現わしてください！ なすことすることみんなキリストの神の栄光です。自分の何ものでもない」

と。それが本当の「キリストの無者」というのです。

